

白い花

逢太衣

つる性の植物が好きで、裏庭に難波なにわいばらと定家蔓ていかかずら、正面の庭に木香もっこう薔薇を植えている。ここに、雑草だが十葉じゅうやくと呼ばれ薬草でもある戩草じくたみも加わり、初夏になるとそれぞれ白い花をつける。

まず、いちばんに咲き始めるのは難波いばらで、アーチに沿ったつるが光沢のある楕円形の葉とともにふっくらと緑の弧を描き、そこへ純白の五弁花がびっしりと散りばめられる。発祥地は中国でアジア原産のため、欧州の薔薇とは異なり、花弁が幾重にも重なっておらず、透けるような白い大きな花びらが五枚、ひらひらと風になびいている。この風通しのよさが好きで、好きな花はと問われれば、大抵薔薇と答えてきたが、正確には、この気候に合った涼やかな薔薇の原種が好きなのである。刺は鋭いが楚々とした香り。花屋には売っていない薔薇が。

五月初旬、毎年決まったように難波いばらが突然咲き、あっという間に散つてしまうと、木香薔薇の白い蕾がぽつぽつ開き始める。この薔薇の特徴は刺が無いことで、花も小さい。ただ、白い花を好む私は、この薔薇の微細な純白に惹かれている。野草のような点描の白に。木香薔薇には黄淡色の種類もあるが、野趣に富む白い花に惹かれ、苗から大事に育ててきた。人は何かを育てていないと死んでしまう。昔祖母から聞いた言葉だが、その通りと思いつつ、咲き終わった薔薇たちの剪定をする。自由奔放に伸びたつるを誘引し終わると、六月だ。

実家の庭にある白梅の梅の実を分けて貰い梅干しを漬けて、と梅仕事が始まる頃。裏庭の定家蔓も白い花をつけ、ジャスミンに似た甘い香りを漂わせる。そのつるは命名にあるように何か因縁めいたように絡みつき、少し花瓶に生けようと茎を切ると白い乳液が滲み出る。まるで生き物の傷口の血液のようにはっとするが、それは、どこまでも白い色の液である。定家蔓の白い花の可憐さとは、そのねじったような細長い花びらを眺めているだけで、何か、過去の忘れがたい記憶が甦る、ということだと思う。その甘い香りと共に、失われた何かを呼び覚ます力があるのだ。つるに転々とぶら下がった、小さな白い花には。

順々に咲いた難波いばら、木香薔薇、定家蔓の花が終わり、六月中旬になると、蕺草の花が満開になる。梅仕事に続き、今度は古来の人と同じ薬狩、蕺草摘みの仕事に入る。蕺草の花びらは真っ白で凜として美しく、とても雑草とは思えない。白色に薄黄色を帯びた細かい小花が密生して棒状の雄蕊を形づくり、その深緑色の葉は見事な心臓のかたちをしている。

その花も葉も悪臭が漂うと言われるが大して気にならない。蕺草の花が満開の時に茎や葉と共に摘み、よく洗ってから天日干しにする。これで一年間、蕺草茶として毎日愛飲する。江戸時代に中国から入ってきた難波いばらや木香薔薇とは異なり、和歌に詠まれた定家蔓と同様、蕺草も古くからこの地に自生していたらしく、古い書物に生薬として蕺しやくや羊麻草、十薬などと記載されている。

こうして、五月から六月にかけて、庭に咲く白い花たちとの交流は、恒例の行事のように続いている。不思議なことに、この野生に近い花々と付き合ううち、それまで何のためらいもなく、進んで身体に入れていたものが、いつのまにか不必要になった。それは、これまで、毎日浴びるように飲んでいた赤葡萄酒のことだが、年齢を重ね、酩酊する心地よさよりも、自然の草木に、静かに心寄せる境地に近づいているのかもしれない。ふと気がつけば、初夏に咲く庭の花たちは薬効のあるものが多かった。こちらが心惹かれる、白い花を育てているようで、実は、こちらが育ててもらっているのかもしれない。